

近づかれる神——ある除け者のあかし

それからイエスは、エリコにはいって、町をお通りになった。ここには、ザアカイという人がいたが、彼は取税人のかしらで、金持ちであつた。彼は、イエスがどんな方か見ようとしたが、背が低かつたので、群衆のために見ることができなかった。それで、イエスを見るために、前方に走り出て、いちじく桑の木に登つた。ちょうどイエスがそこを通り過ぎようとしておられたからである。イエスは、ちょうどそこに来られて、上を見上げて彼に言われた。「ザアカイ。急いで降りて来なさい。きょうは、あなたの家に泊まることにしてあるから。」ザアカイは、急いで降りて来て、そして大喜びでイエスを迎えた。これを見て、みなは、「あの方は罪人のところに行つて客となられた。」と言つてつぶやいた。ところがザアカイは立つて、主に言つた。「主よ。ご覧ください。私の財産の半分を貧しい人たちに施します。また、だからでも、私がかましまし取つた物は、四倍にして返します。」イエスは、彼に言われた。「きょう、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのですから。人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。」

ルカの福音書一〇章一節〜一〇節

皆さん。私は、とても、神さまのことを、あかしてできるような者ではございません。私は、今でこそ、イエス・キリストに従う者ではありますが、それまでの私の生き方ときたら、それはそれは大変なものでした。私は、神さまとはまったく無縁の生き方、いや、むしろ、神さまに反抗するような生き方を、あえて選んできたような者です。

そんな私が、このように、神さまのことをあかしするようになるとは、一体、誰が想像できたでしょうか。それはただ神さまの恵みによつたのですが、それでも、私のような者が神さまのことをあかししては、かえって、神さまの御名を汚してしまうのではないかと、本当に、恐れました。

けれども、神の家族の兄弟姉妹たちは、私のような者が神さまの恵みを受けたことによつて、かえって神さまの恵みの尊さが分かるようになった、と言つ

てくれました。

そう言われて考えてみますと、神さまの恵みは、私のような、どうしようもない者と人から言われ、自分でもそう認めていた者を、ご自身のものとしてくださったほどに、深く大きなものです。私は、このことを、皆さんにどうしても知っていただきたくて、あえて自分の恥をさらけ出しつつ、このあかしをさせていたかどうかと思つたのです。

*

私は、今、「取税人のかしら」をしております。こう言いましても皆さんにはお分かりにならないでしょうから、少しそのお話をさせていただきます。

どこの社会でも、税金を取り立てる人は敬遠されていますね。でも、ユダヤでは、むしろ、憎まれていると言つたほうがいくらいなのです。それには理由があります。

それを分かつていただくには、ユダヤでの税金の取り立て方法についてご説明しなくてはなりません。

少し込みいった仕組みになつていますが、ごく簡単に言いますと、ユダヤを支配しているローマ帝国の係官が、収税の権利の入札をします。その権利を獲得した者の多くは、取税人のかしらに収税を請け負わせます。実際に収税に当たるのは、取税人のかしらの下で働く取税人たちです。

税金は、支配者が、支配している者たちを搾取するための手段です。また、自分の支配下にある者たちが力をつけて反乱を起こすことがないようにするために、重い税金を課す必要があります。実際、ユダヤの人々は、重い税金を課せられて、あえいでいました。言ってみれば、税金によつて、自分たちが支配されている者であることを思い知らされているのです。私たち取税人は、その支配者の手先と見なされていきましたので、「愛国心のかけらもない者」とか「裏切り者」と呼ばれ、ローマ帝国に対する憎しみが、私たちにぶつけられていました。

さらに、ローマ帝国に納めるべき税金の額は定められますが、実際に税金を取り立てる上での限度額は定められておりません。それで、ローマ帝国に納める額より多く取り立てれば、その差額は自分たちのものになります。取税人たちが、不正な取り立てをしたり、金持ちたちから賄賂を受け取つて「手心」を加えたりして、蓄財に励むことは、めずらしいことではありません。どんなに不正であごぎな取り立てをして、取税人の背後にはローマ帝国がありますか

ら、一般の人々にはどうすることもできません。

そんなわけですから、私たち取税人はユダヤの社会では除け者です。その他に、神さまの律法の教師であるラビたちの教えに従わない者たちがいるのですが、そのような者たちは「罪人」と呼ばれています。「取税人と罪人」といえば、ユダヤの社会の悪人が揃ってしまいます。

かく言う私も、その仲間です。皆さんは、今、神さまの恵みを受けて、イエスさまに従っている私が、どうして、まだそのような仕事をしているのか不思議に思われることでしょう。そのことにつきましては、後ほどお話しします。

*

さて、ご覧のとおり、私は、生まれつき背が低かったので、そのことで人知れず悩みました。もちろん、そんなことを気にする方がおかしいのです。そのことはよく分かっていました。それで、自分がそのことで悩んでいることを人に知られることは、もつと恥ずかしいことだと感じていました。これは、本人にしか分からない悩みです。背が低いというだけで、何か男として一人前でないように感じられましたし、実際に、人からばかにされたこともありました。

そのうちに、人が何かささやいているのを見ても、私のことを笑っているように見えたりするようになってきました。親切にしてくれる人がいても、きつとこの人も心の中では私のことを笑っているのだ、と思ってしまうのです。これでは、ますます、卑屈になってしまい、人に対しても素直になれなくなってしまうですね。次第に、人々が自分から遠のいていくのが分かりました。本当は、私の心の姿勢が問題だったのですが、それも、私が背が低くて見栄えがしないせいだと思っただけであきらめていました。

こうして、私の心には、劣等感が焼き付いてしまいました。それからの私は、この劣等感から逃れようとしてきただけだと言ってもよいほどです。今、皆さんの前に立って、平気な顔をしてこのようなことを言っています。まったく恥ずかしくないと言えましょう。それほど、私の心には劣等感が染み込んでしまっているのです。

私は、何とかして、私をあざ笑っている者たちを見返してやりたいと思いつけておりました。心の底にたまっている、人々へのひそかな憎しみは、逆に、私のエネルギーとなりました。どうせ、まともにやっても、ろくなことはできないし、人からばかにされるだけならば、人のいやがることでもいいから、人に嫌われることでもいいから、とにかくお金を貯めて、皆を見返してやろうと

決心しました。

とはいえ、その決心は楽なものではありませんでした。私が取税人になれば、父や母も世間に顔向けができなくなると思うと、さすがに、開き直った私も悩みました。でも、最後には、私が背が低く生まれて苦しんでいるのも親のせいだと考えて、決心しました。

そう開き直ってしまいますと、もう怖いものはありません。世間が何と言おうと、怖くはありません。一日も早く金持ちになって、皆を見返してやりたい——そうすれば、劣等感も吹き飛んでいくと思っております。そんなわけで、私は取税人になりました。

*

私のように、自分自身に対する劣等感と、社会の人々へのひそかな憎しみをうちにもっている者は、こういう場合に、どうなるか、お分かりになるでしょうか。今思い出しても、本当に恥ずかしい思いがいたします。

ローマ帝国の権力を背後にもつ自分が、何かそれだけで、強く大きくなったような気がしました。あこぎな取り立てをしました。今まで私のことと見くびっていた人たち——繰り返し申しますが、本当に、その人々が私のことを見くびっていたというより、私が、その人々は私のことを見くびっていると思っただけだと、今は分かっています。——その人たちをも、私に逆らえないことが分かると、何となく自分が偉くなったような気がしました。

貧しい人々のなけなしのお金まで、厳しく取り立てました。子どもを抱えて、明日の食べるものにも困ると言われても、取り立てました。今、その人たちの悲しい顔——もう怒りを現わすことさえできなくなった悲しい顔が、私を悩ませます。そのために、一体、何人の子どもたちが飢えて苦しんだことでしょうか。そのために、病気になる子どもも、いのちを落としてしまった子どももいます。

その頃の私は、そのようなことを考える余裕もありませんでした。と言うより、わざと、そのようなことを考えないようにしていました。そのようなことに心を奪われていては、取税人として成功することはできません。それに、困り果てた人々が、私に「もう少し待ってくれ」と頼んでくるのを突っぱねる時には、特に、自分が力のある者であるかのように感じる事ができたのです。

そんなわけですから、私はメキメキと頭角を現わし、取税人仲間からも一目置かれるようになりました。やがて、取税人のかしらとなり、大変な金持ちに

なりました。大きな家も建てて、思ってもみなかった美しい妻もめとりました。——困っていた家にお金を貸して、言ってみれば、その借金の担保のようにしてめとったのです。

今にして思うと、妻を愛していたというよりは、自分をより大きく見せるためであったと言う他はありません。ですから、その頃の私は、妻に対しても「後ろめたさ」があつて、素直になることはできませんでした。心ひそかな計算があつて、妻を利用していろいろなところがあつては、愛が生まれてくるはずはありません。

私は、結婚して、かえつて淋しくなりました。それは妻のせいだと思つて、妻に憎しみを感じることもありました。もちろん、問題は私の方にありました。今では、そのことが分かります。けれども、その頃の私は、私があこぎな取り立てをすることに、特に、貧しい人たちからも容赦のない取り立てをすることに、何とも言えない悲しい顔をしていた妻——妻も貧しい家の出ですから——その妻の悲しい顔が、私への非難の顔であるとしか受け止められませんでした。

*

こうして、私が若い頃から追い求めていたものは、自分のものとなりました。思った通りになったのですから、満足するはずです。ですから、自分はこれでいい、満足していると、自分に言い聞かせました。

皆さん、このような気持ちがお分かりになるでしょうか。自分は満足していると自分に言い聞かせる——あるいは、自分が満足していることを一生懸命に確かめるのです。本当に満足している人は、そんなことはしません。

ここまで来る間、あんな素晴らしいなあ、こうなつたらいいなあ、と思いつながら、ガムシヤラにやっていたときには、何となく、自分の人生が充実しているように思えました。その先には、本当に自分を充実させてくれるものが待っている、思い込んでおりました。しかし、いざ、思っていた通りになつて、求めていたものが手に入つてしまうと、かえつて、空しくなつてしまつたのです。

そのようなことは、まったく予想もしていませんでした。それでも空しいというふうな事になつてしまいますと、自分の人生は、それこそ、何もなくなつてしまいます。そのようなことにはとても耐えられません。それで、必死になつて、「これでいい。」とか「満足している。」と自分に言い聞かせていたので

す。

それは行動にも現われて、いかにも充実し、満足しているかのように振る舞っていました。回りの人々も、私が満足していると思っていました。今思うと、まことに愚かなことですが、その頃は、そうやって、自分も他人も欺いて生きていました。

ところで、どのようにして、いかにも充実し、満足しているかのように振る舞っていたか、お分かりになりますか。自分の外側を豪華に飾るのです。家をますます立派にし、きらびやかな着物を着て、おいしいものを食べる・・・というようにです。こうしていると、本当に満足しているように思えてきます。しかし、それを持續させるのが大変なのです。それまでと同じことをしていても、もう満足感がなくなってしまうです。それで、もっともつと飾り立てなくてはならなくなります。そうすると、また、その満足感を持續させようとして、さらに色々なことをするので。

これは、もう、一種の中毒のようなものです。でも、それが分かったのは、後になって、神さまの恵みによって、そのような悪循環の中から解放されてからでした。

皆さん。そのような生活を続けてきた者として、あかしいたします。外側を飾り立てることや、ものを増やすことで人生を充実させようとするのは、このようなものです。それは、自分自身を充実させることではありません。人間と人間のいのちは、そのようなものでは、決して満足できないように造られているのですね。

*

そのように、自分の人生は充実している、自分は満足しているということを、自分に言い聞かせ、他の人々に納得させようとして、心を配っているうちに、何とも言えない空しさ——もうそのようなことではごまかすことができない空しさに襲われるようになりました。今思うと、それが神さまの、私に対する恵みの第一歩だったような気がします。

でも、その時は、やはり、宴会などでばか騒ぎをしては、それを紛らわそうとしておりました。その空しさは、だんだんと私を悩ますようになりました。悪いことには、その空しさに襲われた時には、決まると言っていていいほど、自分がこれまでしてきたことによって、痛めつけられ、途方に暮れてしまっていた人たちのことが思い出されるのです。

私は、宴会などでばか騒ぎをしながら、時々、同じ仲間の取税人たちも、本当は、自分と同じように空しくて、そして、そのことを認めたくないの、自分が満足していることを自分自身と仲間にアップルしようとして、このようなことをしているのではないかと思ったりしたものです。

本当は、そんなに楽しくはないのに、こんな形でお付き合いをしていないと、不安で仕方がなかったのです。

*

先ほどお話ししましたように、自分は空しいとか、これまでの人生は空しかったというようなことを認めてしまいますと、自分には何もなくなってしまう。それは、とてもできない相談です。

今、振り返ってみて分かるのですが、どうして、そのような空しさを感じながらも、やって来られたのか——外側を飾ってごまかしながらやってきたことができたのかと言いますと、人々が、私たち取税人のことを「取税人」、「罪人」と言つて憎み、さげすんでいたからです。おかしなことですが、社会の人々が、こぞつて、私たちのことを「取税人」、「罪人」と言つて憎み、さげすんでいるのを見ると、変な勇気が湧いてくるのです。自分がこれまでに築き上げてきたもの、この取税人のかしらとしての地位、この家、この財産、ゼいたく暮らし……こういうものをしっかりと持って、その憎しみやさげすみに対抗していたのです。

この点で、私たち取税人仲間が結束していました。誰かが結束を口にしたというようなことはありませんでしたが、思いはつながっていました。考えてみますと、それは、人々が私たちに投げつける憎しみとさげすみに支えられている結束と言うべきものでした。

*

そんな日が、長いこと続きました。そうした中で、ある時、妙なうわさを耳にしました。それまで何とは無しに結束していた取税人仲間の結束が、どうも、破られるようなことがあるというのです。開き直つて、「取税人」、「罪人」と言われることを生き甲斐のようにしてきた私たちの中から、「まとも」になつた者たちが出てきたというのです。何か、裏切られたような気がしました。

それで、調べてみますと、ナザレという村から出た、イエスという教師がいて、どういうわけか、私たちの仲間と付き合つて、食事をしたり、教えを説いたりするということです。律法の教師であるラビは、「取税人」や「罪人」たち

と交わつて身を汚してはならないと教えられていますから、これまで、そのようなことは、まったくなかったことです。

聞くところによると、このナザレのイエスには、特に選ばれた弟子がいて、その中に、もとは取税人だったマタイという人もいるということでした。これには、さすがの私も、内心驚きました。

私が、このナザレのイエス——つまり、イエスさまのことで、何よりも気に入ったのは、私たち取税人を最も憎み、さげすんでいた、パリサイ人や律法学者たちと対立してばかりいるということでした。それだけで、何か仲間のようないやな気がしたものです。

イエスさまの教えは、「敵をも愛せよ。」という、何か途方もないことだということも聞きました。まだ、イエスさまのことをよく知らなかった頃の私などは、仲間といっしょになって、その教えを冗談の種にしていました。当時のユダヤの敵はローマ帝国でした。その敵の手先となって働いている自分たちは、敵をも愛しているわけだ、というようなことを言つては、下品な笑いを吐いていました。

でも、ふとした時に、ひよつとしてイエスさまは、ユダヤ人が憎んでいる私たち取税人を愛せと言っているのだろうか、と思つたりもしました。でも、それが本当なら、このユダヤの社会はひっくり返つてしまふ。そんな思いに、むしろ、戸惑いを覚えました。

このようにお話ししますと、皆さんは、私が、そのイエスさまの教えに感動したと思われるかもしれませんが、実は、そうではなかったのです。第一、そんなことはできるわけがないと思つていました。そんなできないことを言つて、いい気になつていような者は、信用できないというのが、私の気持ちでした。それに、皆が私たち取税人を愛するようになってしまつたら、これまで、憎しみを受け、さげすまれることを肥やしにして「なにくそ」とやつてきた私たちは、どうなつてしまうのか、かえつて不安でした。

*

肯定的にせよ否定的にせよ、このナザレのイエスという方のことは、私の思いに微妙な変化を与えました。先ほど、私に対する神さまの恵みの第一歩として、時々、言いようのない空しさに襲われるようになったと言いました。そして、その空しさの中で、自分がこれまでしてきたことによつて傷つき、痛んでしまつた人々のことが、よく思い出されたと言いました。イエスさまのことを

知ってからは——といっても、まだお会いしたことはありませんでしたが——、どういうわけか、私が傷つけ痛めつけてしまった人々といっしょに、イエスさまのことが思い出されて仕方ありませんでした。私には、イエスさまも、同じ律法学者仲間から総スカンを食らって、傷ついていると思えたからでしょう。それも、あこぎな取税人たちと交わっておられるということに、私も魅かれていたのでしょうか。いまだに、その点はよく分かりませんが、これが、神さまが、次に、私に与えてくださった恵みでした。

*

ある日のことでした。何やら通りが騒がしくなりました。通関税も集めている私たちは、つい、通りがにぎやかになったのは、町の外から有名人が、荷物をいっぱい持って来たのではないかと期待してしまうわけです。しかし、何と、それはナザレのイエス——イエスさまだというではありませんか。私はまだお会いしたことがなく、自分であれこれ想像していただけだったので、どうしても、そのお姿を見たくありません。

それで、走っていきますと、黒山の人ばかりです。後ろから背伸びをしても、何も見えません。背伸びをしても、やっと他人の首の辺りしか見えないものですから、私の中に劣等感がじわつとよみがえってきました。でも、その時は、そんなこともすぐに忘れるほど、イエスさまを見たかったです。それで、人垣をかき分けて前に行こうとしました。

人々は、私だと分かると、わざと、私の足を踏みついたり、私を突き飛ばしたりしました。自分に向けられている憎しみの深さを、改めて、思い知らされました。

そうになると、悔しさもあって、こちらも意地になってきました。イエスさまを見たいという思いは変わっていませんでしたが、それ以上に、この意地悪に負けないで、絶対に、イエスさまを見てやれ、と思うようになりました。それで、道の先にあるいちじく桑の木に登って、そこから見ようと思って、走って行きました。そして、子どもでもあるまいに、本当に、その木に登ってしまったのです。それが、イエスさまに対して、失礼なことであるということは、すっかり忘れてしまっておりました。

私に気づいた人々は、憎しみの言葉を投げつけたり、木の上にいる私をあざ笑ったりしました。中には、木をゆすったりする者もいました。イエスさまが見えたことは見えたのですが、こちらが大変なことになってしまいました。

その時、私は、一生涯忘れることができない、私の光栄の源であり、喜びのもとである、イエスさまの御顔に接し、御声を聞いたのです。イエスさまが御顔を上げられて私の方をご覧になったとき、私は本当に驚きました。いつも人の顔を窺って生きていた私は、その瞬間に、自分はこの方のことを、あれこれ想像していたけれども、本当はよく分かっていたこと——この方は、自分の想像をはるかに超えた、容易ならぬお方であることを、直感いたしました。

イエスさまが、お声をかけてくださらなかったら、私は、自分がどこにいるかも忘れて、木から落ちてしまっていたかもしれませぬ。イエスさまは、

ザアカイ。急いで降りて来なさい。きょうは、あなたの家に泊まることにしてあるから。
と言われました。

私は、耳を疑いました。確かに、私の名前を呼ばれたのです。イエスさまは、いつ私の名前をお知りになったのでしょうか。その時は不思議でなりませんでしたが、今では、私の痛みも苦しみもすべて知ってくださいるために、永遠の神の御子としての御力を働かせてくださったのだと信じています。本当に、イエスさまは、そのようなことのためにこそ、永遠の神の御子としての御力を働かせてくださる方です。

イエスさまが、私の方をご覧になって、私の名前を呼ばれたことだけでも大変なことなのに、私の家の客となってくださいる、と言われたのです。私も驚きました。もつと驚いたのは、そこまでイエスさまについて来た人々たちです。それまで、私に憎しみの目を向け、あざけりの言葉を投げつけていた人々は、一瞬、言葉を失ってしまいました。そして、ざわめきとどよめきの声がわき起こりました。

誰にも信じられないことが起こったのです。いくらイエスさまの弟子の中に取税人がいるといっても、それは普通の取税人でしょう。私はそのかしらで、人一倍の憎しみをかってきた者です。そんな私のところに、イエスさまが来てくださるというのです。

*

イエスさまをご案内して家に帰る時の、私の気持ちを想像していただくことができるでしょうか。初めのうちは、冗談ではないかと思って警戒していたのですが、本当に私と一緒に来てくださるお姿を見て、私は、もう子どもよう

に有頂天になってしまいました。この数十年の間に、こんなに心が踊ったことはありませんでした。

でも、正直に申し上げましょう。その時でも、私の心の中には、本当に卑しい思いがわいてきていたのです。自分は、この有名なイエスさまをお迎えしようとしているのだと思うと、何か自分が誇らしくなってきました。ふと、イエスさまも、自分が金持ちだから家に来てくれるのではないかと、今から考えると本当に恥ずかしい思いさえ、もってしまいました。内心では、イエスさまをお迎えする自分を人に見てもらいたかったのです。

イエスさまをご案内して家に帰ると、人々もソロソロとついて来ました。人々も、半分は信じられなかったのでしょう。無理もないことです。もしかしたら、最後に「どんでん返し」があつて、私が恥をかくようになることを期待していたのかも知れませんが。でも、本当にイエスさまが私の家に入られると、人々の表情はこわばりました。そして、あちこちから、不満の声が聞こえてきました。

あの方は罪人のところに行つて客となられた。

それを聞いて、私は、はつとしました。——この方は、私のような者のところに来てくださったことによつて、こんなに多くの人々を失つてしまった。このことで、これまでこの方について来た人々の心は、完全にこの方から離れてしまった。——愚かにも、あの卑しいことを考えていた私にも、やつと本当のことが見えてきました。そして、本当に、悲しくなつてしまいました。

この私が、人のことを思つて悲しくなるなんて、そのようなことは、これまでなかったことです。人から受けた仕打ちが悔しくて、自分のために泣いたことは、いくらでもありました。儀礼で泣いたこともありました。けれども、その時は、何の駆け引きもなく、本当に悲しかったのです。

その悲しみは、私のような者のために、イエスさまがお支払いになつた犠牲の大きさへの悲しみでした。また、そのことに気がつかないで、イエスさまを利用するようにして、自分を誇つていた自分自身への悲しみでした。私は、何と自己中心な者なのでしょう。その時初めて、私は、自分が罪人であるということが分かりました。皆から、「取税人」、「罪人」と言われていた時には、決して分からなかった自分の罪が、分かつたのです。

今、私は、これ以上のことを、あかししないではられません。イエスさまは、このような私のために、人々から見捨てられただけではありません。もつ

とまったく大きな犠牲を払ってくださいました。私の自己中心と、私がこれまでなしてきたすべての罪——人を憎み、自分を肥やすために、貧しい人々からも容赦なく取り立て、苦しみ、何人かを死にまで追いやったこと——それらすべての罪を、私に代わって神さまの御前に償ってくださいるために、十字架にかかって、ご自身のいのちを捨ててくださいったのです。

*

話は元に戻りますが、その時、私は、こんなにまでして、私を受け入れてくださったイエスさまがおっしゃることは何でも聞いて従おうと思うようになっていました。でも、イエスさまは何も言われなくて、私たちともに食卓に着いてくださり、家族の祝福をお祈りしてくださいました。私は、もう、自分で決断するほかはない、と思いました。それで、

主よ。ご覧ください。私の財産の半分を貧しい人たちに施します。また、だれからでも、私がかまし取った物は、四倍にして返します。また、と申し出ました。

自分で言うのも何ですが、そこには、いいところを見せようというような思いはありませんでした。もちろん、それで私が貧しい人々に加えた仕打ちが帳消しになるなどは、思ってもいませんでした。どれほどの財産が無くなるのか、そんなことはまったく気になりませんでした。

人々から憎まれ、さげすまれていた時には、財産をふやして、人々の憎しみに対抗してきました。それによって、かえって、もつと多くのものを持たないと、たまらなく不安になる悪循環に陥ってしまいました。しかし、私は、こんなにまでして、私を受け入れてくださったイエスさまの御前では、もう、財産がどれくらいあるというようなことは、どうでもよくなっていました。

その時、イエスさまが、
きょう、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのですから。と
言ってくださいました。

私がイエスさまに申し出た言葉に啞然としていた妻も、そのお言葉によって、すべてを察したようでした。初めのうちはうつむいて涙ぐんでいましたが、その顔が、だんだんと笑顔に変わっていくのが分かりました。本当に美しい笑顔でした。初めて、妻と心がつながったと感じました。

*

ここで、私が、なぜ今も、取税人のかしらとして、人々からの憎しみを受け

る仕事をしているのか、お話ししたいと思います。それにはいくつかの理由があります。

一つは、収税の仕事が悪いものにしたのは、この私たち取税人です。収税の仕事そのものが悪いものではありません。ですから、私は、この仕事にとどまっ
て、この仕事の本来の姿を回復しなくてはならない、と考えたのです。それが、
取税人のかしらである私に近づいてくださり、私を罪の自己中心性から解放し
てくださったイエスさまにお応えすることである、と信じています。

もう一つは、私と同じ取税人仲間、イエスさまをあかしするためです。私
には、仲間の気持ちが良い分かります。見たところは裕福でも、不安で、空
しく感じていること、それでも、そのことを決して認めようとはしないことを知
っています。そして、人々の憎しみを、逆に糧として支えられているような状態
にあることも、知っています。

そのような取税人仲間の心に触れるためには、私自身が、取税人として、人々
から除け者とされ、憎しみを受け続けなければならないと信じています。――
どんなに正直に働いたとしても、また、部下の不正に対して四倍の償いをして
も、「敵のために働いている裏切り者。」と言われて、憎まれることやさげす
まれることがなくなるわけではありません。私は、その憎しみやさげすみを甘
んじて受け続けることによって、取税人仲間の一員となって、あかしを続ける
ことができると思っています。

正直に言いまして、辛いことではありませんが、心の奥には、不思議な平安と
喜びがあります。

*

イエスさまは、私のような者に近づいてくださり、私の神になってください
ましたが、私は、その後、私が「えこひいき」されたのではないことを知りま
した。つまり、私だけが特別なのではなく、同じ取税人仲間たちにも、私と同
じことが起こったことをあかしすることができます。

イエスさまは、私の内側に巣くっていた、この上なく深い罪の破れを通して、
私に近づいてくださいました。そして、最後には十字架の上でご自身のいのち
をお捨てになって、神さまの御前の私の罪を償ってください、私をご自身のも
のとしてくださいました。

ご自身が、

人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。

と、あかししてくださいましたように、イエスさまは、罪の破れに傷ついて、悲しんでいる人や苦しんでいる人のところに来てくださいます。

皆さんの中に、ご自分のうちに破れがあって、人知れず悲しみ、苦しんでおられる方がおられましたら、私は、この、神の御子イエス・キリストをご紹介します。イエスさまは、その破れを通して、あなたに近づいてくださいます。その破れを通して、あなたのうちにお入りになり、あなたをご自身のものとしてくださいます。

以上で、私のつたないあかしを終わります。